

本書は、岩手県宮古市教育現場での防災の取り組み、被災状況、復興の記録である。前国立教育政策研究所所長・徳永保氏は、戦後日本の「青空教室」において、「学校施設が復興されず、衣食住が十分でないのにもかかわらず、何にも先駆けて教育が再興」されたことを想起する。社会教育の視点からは、「リヤカー引つ張つても図書館だ」という戦後の図書館の気概を思い出させる。

葉養正明氏は、震災以前の教育活動にどう戻るかという「教育復旧」の観点から、震災を糧とした取り組みをどう切り開くかという「教育復興」の観点への転換を示唆する。そして、①PISA等の国際順位の下下に敏感に反応した結果としての「ゆとりと充実」路線から「確かな学力」路線への軌道修正、②教育指導や学校運営の効率性を高めることに視点を置いた学校の適性配置政策の推進の2点について再検討を促す。

①に対して、被災地では、「学

震災からの教育復興

—岩手県宮古市の記録—

1 震災時の被災状況
2 震災後の被災状況
3 震災後の教育復興
4 震災後の教育復興
5 震災後の教育復興
6 震災後の教育復興
7 震災後の教育復興
8 震災後の教育復興
9 震災後の教育復興
10 震災後の教育復興

震災からの教育復興 岩手県宮古市の記録

国立教育政策研究所 監修
2625円 悠光堂
☎03-6264-0523



習のケア」だけでなく、「心のケア」「生活のケア」が行われてきたというのである。日本の子どもたちも、学校が楽しいという子が多い。理由は「友達と遊べるから」である。教育においては、例えばその交友関係が支持的風土になるように指導することこそ重要といえよう。

②について、葉養氏は、学校を地域コミュニティの文化拠点として考える観点を効率化の観点と並立的に捉え、前者に遊びや住民の満足度を組み込んだ発想を見いだしている。生涯教育の視点からこれを読んで、学校教育がそもそも児童・生徒一人一人の幸福追求と生涯学習の基礎づくりのためにあり、また、学校施設が住民の生涯学習の拠点の一つとして存在していることを再確認することができた。

(聖徳大学教授・西村美東士)

BOOK